『この橋、渡るべからズ』

舞台中央、手前から客席へ橋が渡っている（とする）
橋の前には立て札が立っている。
「この橋、渡るべからず」と書かれている。
上手側奥には団子屋の店先があり、長椅子が二脚並ぶ。
店の中は出入りが可能。
上手、下手ともに舞台奥側に、通路がある。
他、邪魔にならないように大きな岩や切り株があり、座れる。

立て札の前に、若先生・かつ・目太郎がいる。

目太郎　おい、こりゃ参ったぜ
かつ　何だってんだろうねぇ
若先生　でも役所の言うことですから
かつ　役所ねぇ
目太郎　ったく、こんなんどうしようもねぇぞ
若先生　困りましたねぇ
目太郎　なぁ。何て書いてあんだ、コレ？
若先生　え？
目太郎　橋の前にこうデンと置いてあんだから、大層なことが書いてあるんだろ？よもや「笑って、許して」とは書いてねぇだろ？
若先生　え、あれ？
目太郎　参ったぜ。読めねえ
若先生　……いやぁ、参りましたねぇ（かつに）
かつ　ホント。私は「夢は時間を裏切らない。時間も夢を裏切らない」だと思うけど、若先生はどう？
若先生　いや、どう？じゃなくて、ですね。え、読めないんですか？

かつと目太郎、目を合わせた後、お互いをニヤニヤと指を差し合う。

若先生　いいですか。「この橋、渡るべからず」です

かつ・目太郎　あぁ、そっちか
若先生　はい、そっちです
目太郎　で、どういう意味だい？
若先生　いや、だから、この橋を渡ってはいけない、というお達しです
目太郎　ちょっと待てよ。そいつぁ困るじゃねえか
若先生　だからそう言ってるじゃないですか！
かつ　それならそうと、早く言ってくれたらいいじゃない！
若先生　ええ……
かつ　もう。帰ってお店開ける支度しなくちゃならないのに。仕込みだってまだ終わってないんだからね！
若先生　え……、ごめんなさい
目太郎　で、どうすんだよ？
若先生　どう、とは？
目太郎　どうしてくれんだよ、この状況を？
若先生　え、わた、私ですか？
目太郎　「この橋は渡れません、あいすいません」じゃ済まないだろうがよ
若先生　まぁ、そうですね
目太郎　おうおうおう！こちとらなぁ、なんとなく向こうに渡りてぇ気分なんだよ。急ぎでもないのにどうしてくれんだよ！
若先生　私に言われても……ん？
かつ　あら大変ねぇ。若先生、お知り合い？
若先生　いえ、初対面です。あ、申し遅れました、私、大河博史郎と申します
目太郎　あぁ、こいつぁ失礼。人見知りなもんで。あっし通り名を「ガチャ目のピン太郎」、人呼んで「目太郎」と申します
若先生　ガチャピ……
かつ　目太郎さん！まぁ素敵なお名前！
目太郎　メタさんでも構いません
かつ　まぁ、メタさん。ところで「目太郎」ってどう書くのかしら？
目太郎　えっとですね……あ、いけね。俺、字書けないや。
かつ　あたし読めないや
かつ・目太郎　（笑）

若先生　参ったなぁ

惣助とりんが入って来る。

惣助、立て札を読む。

惣助　この橋は渡れないらしい

りん　じゃあ、この先（上手側）の橋を

惣助　いや、それじゃあ随分遠回りになってしまう

りん　ではもう片方（下手側）の橋を

惣助　同じことです。どちらも随分な距離がある。それに……

りん　私のことは気にしないで

惣助　おりんさん。これ以上、あなたに負担をかけるワケにはいかないよ

りん　惣助さん

惣助　さぁ、しばらくあの茶屋で休もう

りん　あい、惣助さん

惣助・りん、団子屋手前の長椅子に腰掛ける。

かつ　完全に二人の世界ね

目太郎　俺たちなんざ眼中にねえな。ありゃ、……ワケありと見たね

かつ　ワケあり？

目太郎　あぁ、「ワケあり」とは「特別な事情などがあるさま」のことを意味します

かつ　わぁ、メタさん、物知りぃ～

目太郎　言うな言うなぁ！（照）

若先生　アンタら一日が長く感じるでしょ！

目太郎　おいおい、若先生、妬いてやがんぜ

かつ　もう、若先生ったら！ やだ、顔が赤くなってきちゃった

かつ・目太郎　（笑）

若先生　……全然わからないっ

団子屋、出て来る。

団子屋　いらっしゃいまし。おやまぁ、男前のお客様で
惣助　お茶をくれるか。あと、何か食べられるものがあれば
団子屋　えぇ、えぇ。手前どもは団子屋を商っております。よろしければ、そちらをお召し上がり頂いてはいかがでしょうか？
惣助　そうか。じゃあ、適当に見つくろって出してくれ
団子屋　はい、かしこまりました
惣助　ところで団子屋。この橋の向こうに町があるのか？
団子屋　えぇ、さようでございます
惣助　もう田畑は見飽きた、早く町に入りたいものだ
団子屋　えぇ、この二ノ橋の向こうはそれなりに栄えておりますので
惣助　ん、ニノハシとはなんだ？
団子屋　この橋の名前を、「二」の橋と申します
惣助　「二」なのか……
団子屋　えぇ。この一帯はその昔、同時期に向こう岸へ三本の橋を掛けまして、それを、それぞれ「一ノ橋」「二ノ橋」「三ノ橋」と呼んでおります（手で「一ノ橋」は下手側、「二ノ橋」は正面、「三ノ橋」は上手側を示す）
惣助　なるほど、そういう呼び名があるのか
団子屋　えぇ、さようでございます。二ノ橋が一番人里から離れてますので、このように閑散としておりますが、渡ってしまえばすぐ町がございます
惣助　そうか。……しかし、閑散というか、何だな、この辺の農地は随分荒れているな
団子屋　えぇ、ここ何年かは天候に恵まれず、随分まずいようです
惣助　ほぉ。で、この店の材料は大丈夫なのか
団子屋　えぇ、まぁ何とか揃えております。ご安心くださいまし。えぇ、では、しばしお待ちを

団子屋、店の中へ入って行く。

目太郎　へぇ、あすこは団子屋か。うめえのかい？
かつ　まぁ、それなりにね。それなりなのに、結構繁盛してるんだよ。ね

ぇ、若先生？

若先生　え。あ、まぁそうですね

かつ　あれ、若先生、こっち岸に来たの、このお店が目当てだったりして？

若先生　ば、バカ言っちゃあいけませんよ！　この大河博史郎、佐兵衛店の寺子屋に手習いの教えをしに来たのであって、やましい動機などございません。それに早く帰って明日の早稽古の支度をしなくてはいけないのです。そんな団子屋で時間をつぶすヒマなんてありませんよ！

かつ　まぁ、聞いてないことをベラベラしゃべるところが怪しいじゃないのさ

目太郎　おいおい、何だ何だ？　あの団子屋が何なんだい？

かつ　看板娘

目太郎　え？

かつ　あの団子屋の娘が向こう岸の町で評判でね、その美貌見たさに男どもがこの団子屋に来るんだよ

目太郎　へぇ～、それで店が繁盛しちまうんなら、大したもんじゃねぇか。なぁ、若先生

若先生　いや、ですから私は……

目太郎　かぁ～、モジモジしやがって

かつ・目太郎　（笑）

一休、テクテク歩いて来る。

一休　おや？

一休、立て札の前へ行く。

一休　フムフム、これは参りましたね。「この橋、渡るべからず」なるほど、それで皆さん足止めを食っているのですね

若先生　そうなんですよ

一休　わかりました。皆さん、私は一休宗純と申します。二つ山向こうの町では「とんちのアレ」と評判の坊主です

目太郎　「アレ」ってなんだ？

かつ　やだ、下ネタ？
若先生　違うでしょう
一休　ここはひとつ、私が皆さんの手助けをさせていただきましょう
若先生　え、それはどういう？
一休　まぁまぁ、あわてないあわてない（ドヤ顔）
若先生　は、はい
一休　（立て札と対峙）「この橋、渡るべからず」か。……なるほどね

一休、座り込み精神統一。
大げさに指先をこめかみにグリグリして考える。
ＢＧＭ「ポクポク音」鳴り出す。

〝ポクポクポクポクポクポクポクポクポクポクポクポクポクポクポクポクポク……〟

若先生　え、長くない？
一休　あわてないあわてない

〝ポクポクポクポクポクポクポク……チーン！〟

一休　よっしゃ、ひらめいた！
若先生・かつ・目太郎　おおっ！
一休　「あわてない」！
若先生　……え？
一休　（懐からようかんを取り出し食べ始める）
若先生　あのぅ、どうしましたぁ？
一休　あ、すみません。私、甘党なんです
若先生　……はぁ
一休　甘いモノっていいですよね、絶対に裏切らない
若先生　えっと……？
一休　川が……、今日も……川だなぁ
若先生　とんちは？
一休　……おう？

若先生　いや「おう?」じゃなくて、とんちはどうなりました？ この橋、渡れるんですか？

一休　渡れませんよ

若先生　へ？

一休　え、だって「渡るべからず」って書いてあるじゃないですか

若先生　いや、だから、それをとんちで……

一休　とんち？ ちょとあぁた、お名前は？

若先生　お、大河博史郎と申します

一休　大河博史郎…… うん、あのね、剣道着さん。あぁた、そう「とんち、とんち」と言いますがね、そもそも「とんち」って何ですか？

若先生　え、と、とんち？

一休　そう、とんち。ホラ、言ってごらんさい

若先生　……と、とんちとは、ひねりがあって面白おかしい、その、困ったことに頭を使って……、あれ、えと

一休　はい、そこのあぁたわかりましたか？（目太郎に）

目太郎　いや、わかんねえ。若先生、全然わかんねえよ！（青春風）

一休　あぁたは？（かつに）

かつ　若先生、アンタにはガッカリよ

一休　ねぇ？ 剣道着さんは意味も分からないものを私に強要する。その苦しみを私は黙って享受する。そんなことが許されていいと思いますか？

若先生　いや、私はそこまで……

かつ　若先生、ひどい！

目太郎　眉毛落とすぞ！

若先生　私は、何もそんな滅多なことを言っているのではなくて、いや、あなたが「手助けを」と言ってくれたので、お得意の？ とんちで何とかしてくれるのかなぁ、と思いまして

一休　何とかしますよ！ 何とかしますから、言ったじゃないですか！

かつ・目太郎　言ったじゃないか！

一休　そう、……「あわてない」と

若先生　「あわてない」？

一休　そう、だからあわてずに考えさせてもらいますよ。しばしお待ちを

一休、座ってボケ～っと考え込む。

若先生　……参ったなぁ

目太郎　まぁ、そう落ち込むな。男はよ……、反省の数だけ、男になって行くんだよ

かつ　メタさん、カッコいい～

惣助　遅いっ

間

惣助　おい、団子屋！ 団子屋～！

団子屋、出て来る

団子屋　いらっしゃいまし。おやまぁ、男前のお客様で

惣助　ん、既視感……？ いや、違う、おい団子屋！

団子屋　いかにも、手前団子屋

惣助　茶と団子、ちと遅くはないか？

団子屋　ええ、手前も遅いかと思います

惣助　お前、バカにしてるのか！

団子屋　いいえ。……お客様、よろしいですか？ 今、ご来店されているのはお客様おふた方だけで、茶と団子が来るのが遅い。それをこの店の主人である私も重々承知している。これらの事柄から導き出されるその答えは？

惣助　な、何だと言うんだ？

団子屋　お客様、私どもが注文をお窺いしてからこれまで、店の裏で何の準備もせず、ボーッと。ボーッと、将棋でも差していたとでもお思いですか？ 囲碁ですか？ ウノですか？ 何の準備もせずに？

惣助　準備をしているのか？

団子屋　これだけ長い時間待たされて出て来る、茶と団子……ご興味ありませんか？

惣助　ん？ ……いや、それは、まぁな

団子屋　ええ、もうしばらくお待ちを

団子屋、中に入って行く

惣助　これは、なんとも、な（りんに）

りん　ええ、楽しみね。惣助さん、ちょっと気が急いてるんじゃないかしら？

惣助　あぁ。いけない、私がもっとしっかりしないと

りん　そう一人で思い込まないで。私だって……そう、私は惣助さんの（と、勢いよく立ち上がりすぐに）あぁ、立ちくらみ（と、倒れ込む）

惣助　おりんさん！（と、抱きとめる）　勢いよく立ち上がり過ぎだ！

りん　（惣助の腕の中で）あぁ、目の前が真っ暗

惣助　立ちくらんでいるからね

りん　けど、次第に闇が明けてきて……そして……あたしの視界には、惣助さん、だけ……

かつ・目太郎・一休　バカじゃねえの！（吐き捨てるように）

惣助　……はい？　何か？

目太郎　ん？　いや、何でもねえ。こっちの話だ

惣助　いや、でも今何か……

かつ　そうよ、こっちの話。これからの米不足について話してたのよ。あなたも見たでしょ、あの有り様。もう大変よ、お米。ほら、お米って「八十八」って書くんでしょ？　お米ひと粒ひと粒には「八十八の神様」が宿っているって言うじゃない。だから、ごはん一杯のお茶碗には、もう神様がものすごい数！　（マイムで茶碗を持ち、見つめ）うっわ、気持ち悪っ！　ねえ、あんたもそう思わない？

惣助　……は？

かつ　だしょ～？

惣助　はぁ……？

かつ　あ～はっはっは

目太郎・一休　はっはっはっは

惣助、相手にせず、りんの様子を見る。

かつ　ふぅ、何とかゴマかせたわね
若先生　そうでしょうか？
一休　大丈夫大丈夫
かつ　一休さん、本当にそう思う？

〃ポクポクポクポクポクポク……チーン！〃

一休　えぇ、うまくゴマかせました
若先生　めんどくさいなぁ……

（続く）